

# 親子関係における期待と青年期の アイデンティティ形成の相互性について

仲野好重 桜本和也\*

Interaction of Expectation and Identity Formation:  
How Parents' Encouragement Influences Psychological  
Development in Adolescence

NAKANO Yoshie / SAKURAMOTO Kazuya

## 1. はじめに

青年期とは本来、「自分とは何者か」または「自分には何が出来るのか」という自分自身の根源的問題と向き合っていかなければならない時期である。この時期がいかに重要なものであり、それと同時に非常に困難を伴う時期であることは良く知られている。それは、この時期を生きる若者が、自分とは一体何者であるかという自己探求を求められる一方で、社会的には不安定的な位置づけを与えられることが多いからではないだろうか。自立（自律）を要請される反面、社会的、経済的、ひいては心理的には親に依存しなくてはならないアンビバレンツな存在でもある。

そのような状況の中、アイデンティティ形成という青年期における重要な課題に対して、現代を生きる若者はどのような意識を持っているのであろうか。今まさにこの時期に直面している大学生と日々向き合う中で、彼らに対してどのような支援のあり方が考えられるのかを本論の著者らは模索してきた。大学生たちのさまざまな体験に耳を傾けると、彼らの親の存在、親の在り方が見え隠れしてくる。特に注目すべきは、親と子の関係の中における親から子への「期待」のかけ方である。子にとって親からの期待は時には励ましにもなるであろうし、時には重圧にもなり得る。しかし、まったく期待されない子どもというのは、自分のとる行動への「見守り」や「張り合い」がないということにもつながり、発達の望ましい結果をもたらすとは考えにくい。親が子にける期待と、それを子がどの

---

※ 立命館大学

ように受け止めていくかは重要な問題を内包しているのである。

本論では、人間の発達に大きな影響を及ぼすであろう親子関係において、特に親から注がれる期待や、何らかの想いが子どものアイデンティティ形成に、どのような影響を与えているのであろうか。この研究では、親からの期待に対する意識及び受容態度と、子どものアイデンティティ形成との関連性について報告する。

## 2. 背景および先行研究

### (1) アイデンティティ

エリクソン（1959）が提唱した心理社会的発達段階理論において、アイデンティティは以下のように論じられている。

「青年期の終りが、はっきりした同一性の危機の段階であるからといって、同一性形成そのものは青年期に始まるわけでも終るわけでもない。つまり、同一性形成はその大半が生涯にわたって続く無意識的な発達過程である。そしてその根源は、早期幼児期における自己是認にまでさかのぼることができる」

このアイデンティティ理論を提唱したエリクソン自身は、アイデンティティの明確な定義づけを行っていない。そのため様々な定義づけが存在し、各研究者の観点の違いからその解釈の方向性も異なってくる。古野（2003）らは青年期におけるアイデンティティ課題の本質が、若者たちの友人関係が表層的関わりに質的に変化したというところにあると指摘している。そして更に、アイデンティティ概念の中でも、特に他者によって支えられるアイデンティティに注目し、友人関係を検討している。

上記の古野の報告の中で興味深い点は、アイデンティティの確立と自己探求心の旺盛さの関連である。つまり、アイデンティティの確立ができている青年は、自己の安定感を基盤に友人との間に積極的で親密な交友関係を築き、更なる自己探求を目的とした付き合い方をしていると述べている。一方、アイデンティティが確立されていない青年は防衛的であり、他者に気を遣いながら行動を共にすることが多い。その結果、それらの青年たちは表面的な友人関係しか築くことが出来ない。このことより、アイデンティティの確立と安定した友人関係には深いかわりがあり、同時に、アイデンティティの形成プロセスにおいて親密な友人を持つ重要性は極めて大きいとしている。

高橋（2001）もエリクソンが提唱した漸成発達論に基づき、アイデンティティの発達と子どもの親に対する親和性との関連について研究している。青年期前期においてアイデンティティの発達の程度が高い青年は、親に対する親和性も同様に高く、加えて同性の親に対して同一視欲求を持つことがこの時期において、アイデンティティの発達に重要な役割を果たしていることを明らかにした。そのような意味において親子関係は非常に重要であ

り、その中でも子どもの親に対する依存的同一視のプロセスが特に重要であると述べている。森下（1977）によれば依存的同一視とは、好意を寄せている者、尊敬している者に対する同一視を意味しており、この場合受容的な親に対して子供は非常に強い同一視を示すとされている。

## （2）自尊感情

自尊感情に関する研究が盛んになってきたのは最近のことであるとされているが、実際には短期間に多くの研究・調査が行われている。それらの研究の中で自尊感情とは、自己と他者との間の比較の中から形成されるもの、と一般に定義づけられている。更には、自己の名前や着衣、装飾や特別の身だしなみなど、自己同一性（アイデンティティ）に関する様々な要素と結びついていることにも注目すべきであろう。

また一方では、自尊感情を「自己意識の感情的側面」や「自己評価の感情」等と定義づけているが、精神分析学者であるフェダーン（1952）は自尊感情について「健康な自己愛」という概念を提唱している。一般に自尊感情の高い人は内的安定度が高いことや、柔軟性に富んでいること、または自己受容がよく出来ており、対人関係においても不安や緊張の度合いが低く、物事にとらわれを持つことなく他人を受容することができることとされる。それに加えて自発性があり、積極的に自己を自由に表現できる、とされる。まさにポジティブな要素がずらりと並んでいるが、言い換えれば、「十分に機能する人間」としての要素が披瀝されているのである。一方、逆に自尊感情が低くなる場合では、自己の無価値感にさいなまれ、その結果不適応に陥る恐れがあると、ネガティブな要素で表現される。

自尊感情の高い子供は、積極的に環境に働きかけ、エリクソンのいわゆる「学ぶ存在」としての確信を実現している。しかし自尊感情の低い子どもは、環境に対して常に不安をもって反応しているともいわれている。よって自尊感情の発達が学童前・中期の自我同一性の発達水準を示す課題「積極性VS罪悪感」の危機の解決に重要な手がかりとなっており、子供から大人への移行期である「青年期」を迎え、「同一性VS同一性拡散」の課題解決に際しても、当然重要な役割を演じていることが予想されるのである。石川（1981）は、女子高校生を対象にして、彼女たちの自尊感情とその両親の養育態度及び自尊感情の相関を調べている。この結果によると、母親の子どもに対する情緒的支持及び子どもの自律性の尊重は、子供の高い自尊感情と結びつく基本的要因であることが見出されている。加えて子どもへの情緒的支持と自律性尊重の高い親の場合、その親の自尊感情が高ければ高いほど、その子どもの自尊感情も高くなるという結果を得た。母親の自尊感情とその子どもの自尊感情の間には一定の正の相関が見出されていることが注目すべき点であるが、この点については柏木（1983）も指摘している。つまり、子どもの自尊感情に関係する最も基本的要因として見出された情緒的支持は、親の暖かさに通じ、また自律性尊重はエリクソンの提唱する基本的信頼に関連するものである。従って子どもの自尊感情は、両親とのかか

わりを基礎とすることと同時に、仲間や教師との相互作用を通して形成されていくということが考えられるのである。

### (3) 期待

斉藤(1996)によれば、世間の期待とはまず「統制」と「秩序」であり、次いで「効率性」であると述べている。そして親たちは無意識の内に、こういった類の意味を持つ世間の基準及び期待に沿って生きることを子ども達に強制しているとしている。子どもたちはそういった状況の中で、親の期待を必死で読み取り、また時には推測しその期待に沿って生きることを自らに強いるという傾向があるとしている。

淵上(1999)は、親というものは我が子の安全と幸せを願わないはずはないと前置きした上で、親は「我が子のため」と大儀を掲げながら子どもへの過剰な期待を生み出していくとしている。更に、親が子どもに期待をかけたとしても、子ども自身がその期待に答えられない場合がある。このような「期待」と「成果」のバランスが上手く取れていない場合、子どもの心に傷を残す場合もあると指摘されている。言い換えれば、親の願いや期待は、必ずしも子どもの身の丈にあった内容であるとは言えず、親の独りよがりな欲求として子どもの心に入りこむことになるのである。

親や家族にとって、子どもの存在がどのような意味をもってきたのかについて、山田(1997)が指摘する点は示唆に富んでいて興味深い。彼女は、子どもの存在意義の変化に注目し、親にとっての「投資財」・「生産財」から「消費財」へ、そして「名誉財」へと変化を遂げてきたことについて考えを述べている。ここで言われる「投資財」または「生産財」が意味するのは、子育ての結果、子どもが将来老いた自分(親)たちの面倒をみてくれるであろうという期待である。この考え方が更に変化し、子どもを育てるということ自体に、親の楽しみが反映されるようになるという「消費財」としての子どもの存在が出現する。そして最終的に、子どもを「いい子」に育てることが親にとっての名誉またはステータスであり、子育ての苦勞が何らかの見返りとして返ってくることを意味する「名誉財」へと変化するのである。「全てを子どものために」という価値観は、親としてのアイデンティティを刺激し、親自身が受ける社会的評価としての「名誉」が享受できるかどうかを問う考え方である。これら一連に見られる子どもの存在意義の変化は、親自身が自らの生きがい喪失し、親としての社会的役割が家庭の内側だけに向けられ、その結果子どもが自己実現の手段になっているということを如実に表しているのではないだろうか。

また庄司(2000)らも「よい子」の存在を挙げ、子どもに対する親の期待を重要視し、親の養育態度と子どもから見た親の期待との間の関連性について考察している。その中で子どもから見た親の期待について探索的な因子分析を行い、「人間的成長」または「社会・経済的地位達成」「進学・学歴」等といった9因子を抽出している。更に2次の分析を行った結果、「自己実現」そして「社会的評価」といった2因子を抽出している。前者は「人間

的成長」「健康性」「身体的活動」そして「友人関係」といった高い負荷量を示した4因子で構成されたものであり、後者は「社会・経済的地位達成」「よい子」そして「進学・学歴」といった3因子において構成されているものである。この分析の結果、親の期待は大きくは、子どもの「自己実現」及び「社会的評価」という2つの側面から捉えられると示唆している。

#### (4) 親子関係

過去と現代における母親の生きがいの変化について言及しているのがわたなべ（1993）である。父親の生きがい在工作上で没頭することで家族を養い、それによって社会や世間から認められることであるのに対し、たいていの母親における生きがいは子どもであると述べている。全ての母親がそうであると断言することは出来ないとした上で、自分の子どもを値打ちのある子どもに育て上げることによって、夫や義父母や友達など、周りの人間から認められようとしているとしている。大部分の男性が仕事によって自己評価していると考えられるなら、大部分の母親は自分でも無意識の内に子育てによって自己評価しているということが言えるのではないかと論じている。

日本の母親がいかに自分の子どもの出来・不出来で優越感を感じたり、劣等感を感じたりしているかについて浅井（2000）は事例を交えて説明している。日本の母親は自身の子どもの学業成績や運動能力が秀でていと得意になり、一方、それらの能力が人よりも劣っているとすぐに落胆するというのである。このように母親が子どもの出来・不出来を自己評価の手段として利用するようになると、母親の関心は社会的に認められた能力を子どもがどれだけ持っているかという一面に集中してしまう結果を招きかねない。そして、母親は子どもの「ありのままの姿」「等身大の実物像」を認めることができなくなるのである。そうなれば、母親は子どもと素直な心の交流を持つことが出来なくなってしまうという弊害が生じる。以下に一例を示す。

『成績のよい長女の父母会に出席するときには一番前の席に座っていたけれど、成績の悪い長男の父母会に出席する時には一番後ろの席に座ったというのです。子供が幼稚園に入ったときから大学生になるまで続いている母親同士のグループで、はじめの頃はどの母親も子供のことについて話していたけれど、今では、子供のことを話す母親のグループと子供のことについて話さない母親のグループの二つに、ここで注目すべきはおのずから分かれてしまったということです。今でも子供のことを話したがる母親のグループはいわゆる出来のよい子供をもっており、その反対に子供のことを話したがるなくなった母親のグループは、いわゆる出来の悪い子供をもっているというのです』。

（『この国の子供たちのゆくえ 子供の現実・虐待・援助の課題』、2000年）

また日本人の持つ「自己評価不安」についても言及しておきたい。自己評価不安とは以下の三つの特徴で表される。まず①人々の評価を気にすること、次に②人々の期待に合わせようとする事、そして③人々と比較して自分の値打ちをはかること、の三つとされている。その中で日本人は、周りの人々から肯定されていると感じている時には、落ち着いていることが出来ても、少しでも否定されている、あるいは否定されそうだと感じると、すぐに精神的に落ち着かなくなるということがよくみられる。そのため周りの人々の評価及び期待に対して敏感であることから、我々は周りの人と同じような行動をとることによって落ち着こうとする傾向が見られる、と考えられている。最終的に我々は、周りの人々の期待に沿おうとするだけでなく、どの程度人々の期待に沿うことができているかという「ものさし」で、他者と比べて優劣を競おうとする。つまり我々は、人々の期待を「ものさし」として、他の人々と比べて自分の値打ちをはかるということを無意識にしているというのである（浅井、2000）。

現代の日本社会では、大人は互いの値打ちを周囲の人間よりもどれだけ功績をあげているかによって競い合っている。実力主義、実績主義とはすべての人に同じようにチャンスが与えられているように思うかもしれないが、そのレースに臨む人々は皆異なった条件の下に生きているのである。個々人の特性を注視、熟考することなく、自らの存在価値を一律の競争ルールで決めていくこと自体に、人間性の喪失や互いの不信感の萌芽があるのではないかと思う。そのような価値観が流布している社会では、大人が子どもの存在価値を決めるときにも、他の子どもと比べて将来どれだけ功績をあげられる可能性を持っているかという相対主義的視点が支配的になる。この点はおおいに危惧すべき問題であろう。

山村（1988）は、母親が自己の利益のために子どもを愛するのではないにしても、母子未分化の状態である以上は、子どもの幸せ＝（イコール）母親自身の願望実現、という考え方につながりかねない、と述べている。例えば、子どもの能力や好みに関係なく、子どもを少しでも「いい（と社会的に言われている）」学校に行かせ、少しでも高給が保証されている職業に就かせようとして、血眼になっている母親たちの姿を挙げている。母親たちの途方もない努力が、我が子のありのままの姿を見ることなしに行われているとするならば、それは結果的に自己の願望が子どもへの押しつけになってしまう。しかし何よりも悲劇的なのは、母親自身が問題の存在にすら気づかないまま、すべては子どもの幸福につながるに違いないとひたすら確信し、邁進し続ける母の姿であろう。

### 3. 仮説

以上の背景及び先行研究をふまえ、以下の仮説を想定した。

仮説① 心理的危機を経験した上で、親からの期待を理解し、受容しているのであ

れば、アイデンティティ形成が促されるのではないか。

仮説② 親からの期待を受容していなくても、対人関係において自尊感情が形成されている子どもはアイデンティティ形成が促されるのではないか。

## 4. 方法

### (1) 調査内容

①自己評価尺度：山本・松井・山成（1982）らの自尊感情尺度を使用し、自己の能力や価値についての評価的な感情を測定するもの10項目を使用した。また菅原（1984）の自意識尺度を使用し、自己の内側の側面に注意を向ける程度の個人差を測定する私的自意識10項目、自己の外側の側面に注意を向ける程度の個人差を測定する公的自意識11項目を合わせて使用した。

②谷（1997a；1997b；1998；2001）によって開発された多次元自我同一性尺度を使用し、自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性のそれぞれ5項目ずつ、計20項目を使用した。また加藤（1983）の同一性地位判定尺度を使用し、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入の危機、それぞれ4項目ずつ計12項目を使用した。

③親の期待に関する尺度については調査者自身で、期待を肯定的に受け止める6項目、期待を否定的に受け止める4項目合わせて10項目の期待尺度を作成し、それに伴って自由記述1題を作成した。

評定は自尊感情尺度及び親の期待に関する尺度について、“あてはまる（5点）”～“あてはまらない（1点）”の5件法で行った。同一性判定地位については“まったくそのとおりだ（6点）”～“全然そうではない（1点）”の6件法で行った。自意識尺度及び多次元自我同一性尺度について“非常にあてはまる（7点）”～“全くあてはまらない（1点）”の7件法で行った。

### (2) 調査対象

関西の私立大学生110名（男性52名、女性56名、内2名不可）

### (3) 調査時期

2004年12月初旬から中旬

## 5. 結果

下記の表1～2は一要因分散分析を行い得られた結果である。まず独立変数である「自尊感情尺度」の得点を高・中・低と3群に分類して抽出し、その後自尊感情尺度の値の高い群をgroup 1、中程度の群をgroup 2、低い群をgroup 3とした。

表1 期待肯定因子に関する一要因分散分析

group	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
1	15	21.47	4.17	1.08
2	77	18.10	4.14	.472
3	16	18.88	5.48	1.37
合計	108	18.69	4.47	.43

分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	142.64	2	71.32	3.75	.027*
グループ内	1998.65	105	19.04		
合計	2141.3	107			

\* P < .05

表2 アイデンティティに関する一要因分散分析

group	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
1	15	106.07	17.49	4.52
2	77	80.26	14.97	1.71
3	16	62.25	22.98	5.75
合計	108	81.18	20.35	1.96

分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	15088.92	2	7544.46	27.09	.000**
グループ内	29238.74	105	278.46		
合計	44327.68	107			

\*\* P < .01

上記の分散分析において有意差が認められた期待肯定因子及び、アイデンティティについてはさらにLSD法による多重比較の結果に焦点を当てる（表3～4）。



表3 期待肯定因子の多重比較

従属変数	(I) group	(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
期待肯定因子	1	2	3.36*	1.23	.007
		3	2.59	1.57	.101
	2	1	-3.36*	1.23	.007
		3	-.771	1.20	.521
	3	1	-2.59	1.59	.101
		2	.771	1.20	.521

\* P < .05

表4 アイデンティティの多重比較

従属変数	(I) group	(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
アイデンティティ	1	2	25.81*	4.71	.000
		3	43.82*	6.00	.000
	2	1	-25.81*	4.71	.000
		3	18.01*	4.59	.000
	3	1	-431.82*	6.00	.000
		2	-18.01*	4.59	.000

\* P < .05

更に、期待に対する捉え方を測定できると考えられる尺度より抽出された期待値を高群と低群の2つの群に分類し、それぞれの次元間における関係性をみるためにt検定を行った。

表5 期待高低群のt検定の結果

N=	期待高群 61	期待低群 47	t検定
自尊感情	30.49 (7.438)	28.91 (5.516)	t(106) = 1.218 N.S.
自意識	148.64(49.819)	154.89(55.166)	t(106) = .617 N.S.
期待肯定因子	21.57 (2.980)	14.94 (3.089)	t(97.288) = 11.243**
期待否定因子	12.80 (1.905)	12.47 (1.840)	t(106) = .924 N.S.
アイデンティティ	84.52(21.166)	76.83(18.577)	t(106) = 1.974 N.S.

\*\* P < .01

加えて質問紙中に「期待を感じているか」という質問項目を掲載し、この問いに対して期待を感じていると回答した群と、期待を感じていないと回答した群の2群に分類しその間での差を見るためにt検定を行った。

表6 期待受容・不受容群のt検定の結果

N=	期待を感じる 43	期待を感じない 65	t 検定
自尊感情	31.67 (7.08)	28.57 (6.16)	t (106) = 2.42*
自意識	144.58(49.07)	155.85(53.84)	t (106) = 1.10 N.S.
期待肯定因子	22.56 (2.83)	16.12 (3.38)	t (106) = 12.74**
期待否定因子	12.98 (1.91)	12.45 (1.84)	t (106) = 1.45 N.S.
アイデンティティ	86.00(21.50)	77.98(19.06)	t (106) = 2.03*

\* P < .05

\*\* P < .01

下記の表7は相関係数を用いて各次元の相関関係を調べたものである。

表7 相関係数の結果 (1)

	自尊感情	自意識	期待肯定因子	期待否定因子	アイデンティティ
自尊感情	-				
自意識	.039	-			
期待肯定因子	.17	-.102	-		
期待否定因子	.107	-.01	-.246*	-	
アイデンティティ	.618**	-.036	.244*	.049	-

\*\* 相関係数は1%水準で有意 (両側)

\* 相関係数は5%水準で有意 (両側)

下記の表8は質問紙に掲載した「親の期待を感じているか」という問いに対して、「期待を感じている」と回答した群と、「期待を感じていない」と回答した群の2群に分類し、その中でも「期待を感じている」と回答した群に焦点を当て、相関係数を用いて各次元の相関関係を調べたものである。

表8 相関係数の結果(2)

	自尊感情	自意識	期待肯定因子	期待否定因子	アイデンティティ
自尊感情	-				
自意識	-.111	-			
期待肯定因子	.219	-.352*	-		
期待否定因子	.197	.004	-.012	-	
アイデンティティ	.622**	-.213	.354*	.064	-

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)  
\* 相関係数は5%水準で有意(両側)

一方、下記の表9は「親の期待を感じているか」という問いに対して、「期待を感じていない」と回答した群に焦点を当て、相関係数を用いて各次元の相関関係を調べたものである。

表9 相関係数の結果(3)

	自尊感情	自意識	期待肯定因子	期待否定因子	アイデンティティ
自尊感情	-				
自意識	-.143	-			
期待肯定因子	.052	.130	-		
期待否定因子	.068	-.033	-.297*	-	
アイデンティティ	.603**	.142	.009	.128	-

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)  
\* 相関係数は5%水準で有意(両側)

同一性地位判定尺度を用いて被験者の各地位の占める割合を検討した。

表10 同一性判定地位による各地位の割合(1)

	N	%
同一性達成	10	9.2
権威受容	1	0.9
A-F中間	10	9.2
積極的モラトリアム	9	8.3
同一性拡散	18	16.7
D-M中間	60	55.6

下記の表11は、同一性地位判定尺度を用いて被験者の各地位の占める割合を示したものである。ただしここでは質問紙に掲載した「親の期待を感じているか」という問いに対して、期待を感じていると回答した群を「yes」、期待を感じていないと回答した群を「no」として2群に分類し、それぞれの群を占める人間の地位判定を行い、同時にその割合を調査したものである。

表11 同一性判定地位による各地位の割合(2)

yes	N	%	no	N	%
同一性達成	7	16.3	同一性達成	3	4.6
権威受容	0	0	権威受容	1	1.5
A-F中間	5	11.6	A-F中間	5	7.7
積極的モラトリアム	3	7	積極的モラトリアム	6	9.2
同一性拡散	7	16.3	同一性拡散	11	17
D-M中間	21	48.8	D-M中間	39	60

## 6. 考察

仮説①「心理的危機を経験した上で、親からの期待を理解し、受容しているのであれば、アイデンティティ形成が促されるのではないか」について、以下に考察を述べる。

- (1) 期待高群と低群の2群によるt検定より、期待肯定因子でのみ1%水準での有意差が見られた。従って親からの期待を高く感じている人間は、有意に親からの期待を肯定的に受容している。
- (2) 表5・6に記載したように「期待を感じているか」という質問項目に対して、期待を感じている、あるいは感じていないと回答した被験者を2群に分類し、t検定によって分析を行った。上記と同様に期待肯定因子において1%水準での有意差が認められるだけでなく、自尊感情及びアイデンティティにおいて5%水準での有意差が認められる結果を得た。これより期待を受容している群と、期待を受容していない群の間においてアイデンティティ形成の程度に差があると考えられる。従って期待を受容しているのか、そうではないのかという違いによって、アイデンティティ形成の程度に影響が及ぶことを意味しており、これは仮説①を立証する上で非常に重要な要因であると考えられる。
- (3) 表8の相関係数の結果は、期待肯定因子とアイデンティティの間に正の相関があることを示している。つまり期待を肯定的に受容している人間は、アイデンティティ形成も促進される傾向があることを示している。この結果から、親からの期待を肯定的に捉えることは、アイデンティティ形成に関し肯定的な影響を及ぼす可能性があることが考えられる。
- (4) 一方、表9において期待を感じていないと回答した群の相関結果を示したが、期待の肯定的受容とアイデンティティ形成の間において相関が見られることはなく、自尊感情とアイデンティティの次元の間において中程度の正の相関があったのみである。従って期待を感じていないと回答した人間にとって、アイデンティティを形成する上で影響を及ぼしている要因は、期待を肯定的に受容することではなく自尊感情であることが考えられる。
- (5) 表11に示したように、期待の受容及び、不受容の2群における割合の比較から、同一性達成地位を除くその他の地位の間において、明確な違いがはっきりとは認められない。つまり期待を受容している人間と期待を受容していない人間の間において、同一性地位判定尺度からは明確な差異が抽出されなかったことを意味しているのではないだろうか。期待の受容及び、アイデンティティと期待の関連性については、上記の考察の中で詳しく述べてきたが、調査対象者の心理的危機の経験という事柄に関しては十分なデータが得られなかったのである。使用した尺度の限界や質問項目の不十分さがあったのではないかとと思われる。今後、さらに詳しく調査を進めて行きたいと思っている。

仮説②「親からの期待を受容していなくても、対人関係において自尊感情が形成されている子どもはアイデンティティ形成が促されるのではないか」について、以下に考察を述べる。

- (1) 表1・2に示したように一要因分散分析によって得られたデータにおいて、期待肯定因子及び、アイデンティティの次元に有意差が見られた。期待肯定因子においては5%水準での有意差が見られたので、更なるLSD法の多重比較の結果、自尊感情高群と自尊感情中群の間において1%水準での有意差が見られた。これより高い自尊感情を形成している人間の方が、中程度の自尊感情を形成している人間に比べ、期待を肯定的に受容しているということが考えられる。従って自尊感情と期待を肯定的に受容することの間には密接な関係性があるといえる。
- (2) アイデンティティに関しては1%水準での有意差が認められ、LSD法の多重比較の結果、自尊感情高・中・低群のそれぞれの間において1%での有意差を得た。これは自尊感情が高ければ高いほど、アイデンティティ形成の程度に差が見られたことを意味しており、自尊感情が高い人間であるほどアイデンティティ形成が促されているということが考えられる。従ってアイデンティティ形成において自尊感情の形成度合いというものが、非常に強い関係性を含んでいると考えられる。
- (3) 表7に示したように、自尊感情とアイデンティティの間に中程度の正の相関が見られる。この結果より高い自尊感情を持っている人間は、高いアイデンティティを形成していることが理解され、自尊感情とアイデンティティ形成の間には何らかの関係性があることが考えられる。これに関しては表8にあるように、期待を感じていると回答した群における分析結果においても同様のことが見られ、自尊感情を形成することは、アイデンティティ形成において非常に重要な影響を及ぼす要因であることが考えられる。
- (4) 表9において期待を感じていないと回答した群を対象にした分析結果より、自尊感情とアイデンティティの間で正の相関が見られた。期待を感じていないと回答した群においても、期待を感じていると回答した群と同様に、自尊感情とアイデンティティの間で正の相関が見られたのである。従ってアイデンティティを形成する上で重要な要因は、期待を肯定的に捉えることのみならず、高い自尊感情を形成することでもあるといえるのではないだろうか。親からの期待を感じていないと回答した人間においても、他の対人関係等の要因において高い自尊感情を形成しているのであれば、アイデンティティ形成が促されていると考えられ、この結果は仮説②を立証する上で非常に重要な要因であると考えられる。
- (5) これらの結果より、仮説②「親からの期待を受容していなくても、対人関係において自尊感情が形成されている子供はアイデンティティ形成が促されるのではないか」は立証されるのではないかと考えられる。

## 7. 結論

仮説①に関しては、親からの期待が子どものアイデンティティ形成において少なからず影響を与えていることが分かった。しかし、期待及びアイデンティティにおいて、心理的危機との関係性を明らかにするためのデータは不十分であった。心理的危機について考えるとき、既存の理論が確立された当時と我々が生きる現代との間に見られる差異を考慮することが、非常に困難であった。また研究を行う中で、親からの期待を感じていないと回答する人間が多かったことは非常に興味深い事柄であった。これは現代の家族を象徴するものなのであろうか。そういった背景の中、子どもは期待を感じていないと述べているが、その子ども達の親たちは本当に期待を持ってはいないのであろうか。それとも期待を持ってはいるが子ども達が受容していないのであろうか。今後は、親を含めた研究を通じ、さらに深みのある考察が行えればよいと思う。

仮説②については概ね立証することが出来たと感じている。自尊感情とアイデンティティの間に高い相関が認められ、両者の深いかかわりを再確認できた。

最後に、今回の研究を通して、親からの期待及び自尊感情が我々のアイデンティティ形成に及ぼす影響は非常に大きなものであると痛感した。どちらか一方を重視するのではなく、双方ともが大きな要因であることを研究結果は示していた。従って、我々がアイデンティティを形成するプロセスの中で、親からの期待や想いを理解し、受容することが肝要であることも理解できた。また、さまざまな対人関係において築かれる自尊感情をしっかりと形成していくことが、我々の中で重要視されていかなければならないと考える。

## 参考文献

1. 浅井春夫 2000 この国の子供たちのゆくえ 子供の現実・虐待・援助の課題 かもがわ出版
2. 乾彰夫 1986 自立にむかう旅 大月書店
3. 上子武次・増田光吉(編) 1981 日本人の家族関係—異文化と比較して《新しい家庭像》をさぐる 有斐閣選書
4. Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle. Psychological Issues. International University Press. (小此木啓吾訳 1973 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
5. 岡島佳樹・近藤洋子・高島二郎他 2001 小・中・高・大学生の生活習慣と自尊感情(セルフ・エスティーム) 玉川大学体育・スポーツ科学研究紀要 2, 39-43.
6. 小此木啓吾 1992 親のこころ、子のこころ—親と教師の心理学— 小学館ライブラリー
7. 小此木啓吾 1996 視界ゼロの家族—夫婦・親子のゆくえ— 海竜社
8. 賀川昌明 2002 大学生の自尊感情と一般的自己効力感、運動有能感、体育授業における態度および成績評価との関連 鳴門教育大学研究紀要 17, 21-27.
9. 斉藤学 1996 アダルト・チルドレンと家族—心の中の子供を癒す— 学陽書房
10. 下山晴彦(編) 1998 教育心理学Ⅱ・発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会
11. 庄司知明・藤田尚文 2000 子どもから見た親の期待について—親子関係診断尺度(EICA)との関

- 連から 高知大学教育学部研究報告・第2部 5, 55-68.
12. 鏑幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (共編) 1984 アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版
  13. 鏑幹八郎・人見章子・畑理恵 2002 浮遊する青年とアイデンティティ形成 臨床心理学 2(6), 738-743.
  14. 園田雅春 2003 「授業改革」と「自尊感情」と「子育て」 河地和子 (著) 自信はどう育つか 解放教育 33(9), 50-52.
  15. 高橋由利子 2003 青年期前期のアイデンティティの発達と親子関係—同一視理論の視点から 目白大学人間社会学部紀要 3, 63-76.
  16. 長崎千夏 2004 子供の自立に対する母親の意識と自尊感情との関連—大学生の子供を持つ母親を対象に 九州大学心理学研究 5, 163-170.
  17. 淵上規后子 1999 親の期待に応えようとしすぎる子 児童心理学 53(17), 1602-1608.
  18. 古野景子・藤原珠江 2003 現代青年の友人関係とアイデンティティ確立との関連 長崎純心大学心理教育相談センター紀要 2, 13-24.
  19. 堀洋道・山本真理子 (編) 2001 心理測定尺度集 I サイエンス社
  20. 真仁田昭 1988 親ごころ子ごころ 金子書房
  21. 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997 未婚化社会の親子関係：お金と愛情にみる家族のゆくえ 有斐閣
  22. 山田美智子 2000 子供の育ちの環境と自尊感情—小学6年生とその母親を対象とした調査から 家族関係学 19, 33-44.
  23. 吉山尚裕 2002 自尊感情と友人とのネットワーク：女子学生を対象にして 大分県立芸術文化短期大学紀要 40, 11-19.
  24. わたなべやすまる 1993 自分ってなんだろう・現代日本人の自己形成 日本エディタースクール出版部

キーワード：アイデンティティ 青年期 期待 親子関係 自己受容

Keywords : identity, adolescence, expectation, parent-child relationship, self-acceptance